



Title	浅川伯教著「鈴木先生」（『京城日報』掲載、1930年5月）による鈴木先生の審美眼の分析考
Author(s)	林田, 雅至
Citation	Co*Design. 2019, 5, p. 65-75
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71647
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

浅川伯教著「鈴木先生」（『京城日報』掲載、1930年5月）による鈴木先生の審美眼の分析考

林田雅至（大阪大学COデザインセンター）

The Analysis of the aestheticism of Professor Suzuki on base of Noritaka Asakawa, Professor Suzuki (*Keijo Daily News*, series 1-6), May,14-20,1930

Masashi Hayashida (Center for the Study of Co* Design, Osaka University)

1921年山口高商から京城高等商業学校・第二代校長に人事異動した鈴木孫彦は、柳宗悦や浅川伯教・巧兄弟らの「民藝運動」の審美的視点と軌を一にする立場をとり、日本民族のみが唯一是とされた当時の総督府の意向を退けて朝鮮「民族」にこだわった1924年「朝鮮民族美術館」創設に同調する。所謂「骨董」趣味が如実に物語る「高等遊民」的耽美主義に陥ることなく、朝鮮の日常器具・陶磁器に高い関心を示すのは、彼の首尾一貫した高邁な文化相対主義的社会性が認められる。「両義的な刷新者」と言える。

In 1921 Magohiko Suzuki who transferred from Yamaguchi Higher Commercial School to the second principal of Keijo Higher Commercial School, took the standpoint of keeping the same aesthetic view point of the Mingei “folk arts,” or Folk Art Movement with Yanagi Muneyoshi and Noritaka and Takumi Asakawa Brothers. In 1924 he respected the expression “Korean ethnic” rejected by the Regional Governor’s Office from the exclusive viewpoint of Japanese Nationalism, and supported the establishment of “Korean National Museum of Art.” The so-called antique collector expresses virtually “Higher Oblomovist” of Aestheticism, but his consistent and sophisticated social consciousness of cultural relativism is recognized for showing a keen interest in Korean craft and ceramics. He is an ambiguous innovator.

キーワード _____ 京城高等商業学校、民藝運動、両義的な刷新者

Keyword _____ Keijo Higher Commercial School, *Mingei* (“folk arts” or “arts of the people”), Ambiguous innovator

1 序文——歴史的資料に関する報告および提示として——

1926年「日本民藝美術館設立趣意書」の発刊により始まった、日常的な暮らしの中で使われてきた手仕事の日用品の中に「用の美」を見出し、活用する日本独自の民藝運動の中心人物・柳宗悦(1889-1961)は雑誌『白樺』の同人であり西洋近代美術の紹介者でもあったが、1914年、朝鮮陶磁研究家・浅川伯教(1884-1964)との出会いを通じて朝鮮美術、とりわけ朝鮮王朝時代の白磁(李朝白磁)、朝鮮民画、家具などの素朴な美を世に紹介するようになり、1920年代前半、文化統治下にあった朝鮮半島において、「朝鮮民族美術館」創設に尽力する。

鈴木孫彦(1878-1930) [1]が1921年京城高等商業学校 [2]に異動した動機は、彼の朝鮮趣味・憧憬の念などや学生同行の修学旅行で何度も訪問していることばかりではない。むしろ、山口高商の大学昇格への無関心——山口高商は大学昇格を待望し、1917年「東亞經濟研究会」を発足させ、中国研究を特化して取り組むことになるのだが——の意思表示であったことが推察される。と言うのも、彼は「東亞經濟研究会」機関誌の投稿原稿を依頼され、「東亞經濟研究会」特製の原稿用紙を渡されるが、一行も書かず、後述されるように子供たちの便箋代わりに用紙は使われているからである。結局、この大学昇格は実現しなかった。

彼が赴任した当時、京城高等商業学校は、正確には朝鮮総督府・朝鮮銀行・満鉄三者出資の財団法人が経営母体とする私立であったが、翌1922年に官立化する [3]。

一方、世界史を俯瞰すると、1922年、state socialismを体現した旧ソ連邦が誕生し、national socialismを具現化した伊でファシスト政府が成立する。やがて、独で全体主義体制が確立し、1933年ヒトラー首相就任(第三帝国)とともに、日本では、1931年帝国大学令を以って大阪大学が京城大・台北大の後、帝大枠に収まり、他方、満州事変が勃発し、それを契機に1933年、軍国主義体制を盤石化する「日独伊防共協定」が締結される歴史的潮流の出発地点で、第一次世界大戦の猛省による普遍的平和主義の「大正デモクラシー」は実質的に終焉を迎え、時代の右傾化が鮮明になる分水嶺の時期である。

1923年9月に東京は関東大震災に見舞われ、朝鮮人が井戸に毒を投げ込んだという流言蜚語が飛び交い、朝鮮人の大虐殺事件が起こり、また大杉栄が虐殺され、雑誌『白樺』も事実上廃刊に追い込まれる。

因みにnational socialism、state socialismはそれぞれ一般的に民族社会主義、国家社会主義と訳されるが、前者はnationのラテン語源nascere(生れる)から、そこで生れた者たちの集団・共同体の枠組みによる社会像(民族共同体による社会像)、後者はstateの語源estare(存在、状態である)から、そこに存在する者たちの集団・共同体の枠組みによる社会像(独立共同体による社会像)とContextual Sensitivityを以って意識し、理解しないとその実態は正確に把握できない。翻訳日本語「社会主義」が独り歩きし、固定観念を生む結果となった。

こうした背景で知り合いとなった浅川伯教は当時最終的な準備段階であった本格的な「民藝運動」出発の契機となる「朝鮮民族美術館」創設に柳、実弟巧らとともに尽力し、教育者鈴木孫彦を運動の

同調者として捉え、朝鮮総督府の機関紙『京城日報』（国立国会図書館所蔵、1915-1945）に投稿し、「鈴木先生」への追悼の念を執筆と言う形で表現している。

これまで鈴木孫彦に関する先行研究はなく、ここではその先鞭をつける「研究ノート」的位置付けで、追悼文を中心にまとめるものである。なお『京城日報』からの引用などは下記に例えば、（浅川 1930：【1】）などの形で引用を示し、原則旧字旧仮名はそのままとする（対象となる記事は、『京城日報』【1】 - 【6】 [1930.5.14 - 5.20]）に連載されたものである）。

2 | 浅川と鈴木の出会いのきっかけ

浅川伯教が京城高等商業学校・第二代校長鈴木孫彦に知己を得るのは、1923年5月京城日報社主催による津田青楓(1880-1978) 展覧会が開催された時である。二科会・創立者の一人・津田は貞洞町の浅川宅を訪問するも、不在で、大和町2丁目鈴木宅を記した名刺を留守宅に預け、鈴木氏宅滞在中を知らせる。その夜初めて鈴木宅を訪問し、話し込む。応接室に、柳宗悦が同人であった白樺派、二科会画家安井曾太郎、岸田劉生らの作品が飾られる。

展覧会終了後、浅川の誘いで、京城の東小門（恵化門）を起点とするピクニックに出かけ、帰り際、鈴木の後姿が「今もはつきり眼に浮かぶ」（浅川 1930：【1】）と浅川は述懐する。

3 | 無類のコレクター 鈴木孫彦

夏季休暇中（日付記述なし）、浅川が誘った江華島旅行は雨模様で、旅先で古物商（爺さん）を訪ね、鈴木はコレクターとして、青磁・銅器など一・二点を購入し、翌朝学校の会議を理由に先に帰る。帰路、雨中の「面白い」追憶、旅先のエピソードとして、「雨の中で爺さんと二人で溝から車を引出した話」（浅川 1930：【2】）をその後、浅川に繰り返し語った。また、京城でも白鳥昇平老人という古物商がコレクター鈴木宅に出入りし、鈴木も学校帰りに時々古物商に立ち寄っている。正真正銘の李朝の焼物、木工品のコレクターであった。山口へ戻る際、鈴木は親交が深かった白鳥昇平に記念に、彼から所望された、コレクションの一つ「ロシアの民藝品の布で作った人形」（浅川 1930：【5】）を贈り、白鳥は鈴木退鮮後、独自の美術観も交えて、京城の近況を頻繁に知らせた。ただ、この古物商がどういう人物であったかは不明である。

浅川の記述によると、みずから数の観念に明瞭で「先天的な直覚力」（浅川 1930：【2】）を有すると自認する鈴木は、得心するまで安定感を追求して、配置・並べ替えを繰り返し「美術器、工芸品、

家具、家内装飾等」(同上)の「動かぬ釣り合ひ」(同)(絶対的均衡美学)に基づく配置によって、鑑賞審美眼を確立する。「朝鮮の四方棚の上に、色々の形や箱や、李朝の壺などをならべ」(同)珍重し、それらを「骨董品」ではなく、柳宗悦の民藝運動思想に通底する「朝鮮の人々の生活から生み出された日常器具」(同)として位置付け、民族的同一地平・視線に立って、実際「朝鮮の人と親しみ、尊敬する」(同)に至っている。これはまた彼の独自の商業教育に結びつき、人間性の向上を図る情操教育に繋がる美育に関する「商品の本質と美」「商人と美育」(浅川 1930:【6】)の重要性を力説し、浅川に京城高商で課外講義科目「商品学」として「繪畫や彫刻や工藝」(同)の教授を要請して、実現している(嘱託講師:1923-26年)。当時、商業は産業化のためとして、適正な規格商品開発をし、その道を拓くものとして商業教育を十全に行なうものとされていたが、鈴木はそれに飽き足らず、付加価値的な商品開発の不可欠性を感じ、浅川に文化相対主義的審美眼教育を託したと思われる。ここにも当時唯一の日本民族主義と、隠された朝鮮民族主義の対等な関係を位置付けようとする姿勢を垣間見ることができる。

4 | 浅川作彫刻「鈴木先生」制作に至る道のり

最終的に「朝鮮美術展覧会」第7回特選となった浅川作「鈴木先生」(1928)に結実した、塑像の首製作の長い約束の間、浅川は「平素よく顔を見てをつたので、今も明瞭にその追想と共に印象が浮かぶ、頭の奥行きが深い人であつた、上から見ると頭骸骨が極めて前後に長い楕圓形であつた、それが爲めに額は突き出し、後頭骨は後に延びてをつた、額にはよい凹凸があつた」(浅川 1930:【4】)とし、彫刻の修業で内弟子となった彫刻家・新海竹太郎(1868-1927)のもとで、「夏目漱石のデスマスクの額の締つた微妙の凹凸に驚いた事があつたが、先生の額もそれに似たものがあつた」(浅川 1930:【4】)と回想する。

さらに鋭い観察眼を生かして「平素鼻が獅子だと妙に氣にして居られた。下顎骨の根部が張り、底部が平で口が一文字に両方に引きしまつてをつたところに決心の強さが見えた。眼は高い額の下に奥に小さく引き込んでをつた、眼に人一倍潤ひがあつた、何かの感動でホロリとする眼であつた、實際もよくホロリとした事の話をした、眼で感じ、額で熟慮し、顎で決行する姿であつた」(浅川 1930:【5】)「學校を退いて、退鮮の日が定まつてから、私の家に来て貰つて、首の塑像を作らせて貰つた、奇麗に櫛けづつて撫でつけた髪の毛の下にある微妙な額の凹凸が、窓の菜園から来る透明の光を反射した調子は今も忘れられぬ」(同上)と浅川は記述を続けるが、余程額の凹凸は記憶に鮮明に残るのか、「道の櫻を越す窓の光の逆光に額を光らせ」(浅川 1930:【2】)、悦に入り「朝鮮陶磁器」などを鑑賞する姿も書き留めている。

5 考察：鈴木孫彦人物像

浅川は最後に、引用した方丈記の諸行無常の仏教思想に抗して、朝鮮に対する厚意、敬愛、「心の本體の永遠ならむことを」（浅川 1930: [6]）、また「思想や記憶や友情の、とこしゑならむことを」（同上）願ひ、鈴木孫彦への追悼・鎮魂としている。劇的に変貌する当時の世相、また文化統治下にある総督府を取り巻く支配戦略・論理の両義性を眼の当たりにして、永遠に続くこと期待したい「現在」に対する脅威、幸福、不安を同時に感じることの難しさを滲ませている [4]。

浅川はこうした状況下において、日朝修好条約締結の契機である1875年武力衝突事件の舞台となった「江華島へ遊んだ旅行」（浅川 1930: [1]）において、「結局青い青磁と青錯の銅器を見に行つた様のもの、島がどこだかどんな島だか何んにも知らずに歸つたのが却つて面白いと云ひ乍ら苦笑した」（浅川 1930: [2]）鈴木に関する浅川の記述から、数寄者・鈴木孫彦を耽美主義を貫徹し、その限りにおいて一種の「高等遊民」と規定しているのであろうか。

そうではなく、柳、浅川兄弟らが総督府の意向を退けて「民族」という二文字にこだわった1924年「朝鮮民族美術館」創設に勿論同調していることから、みずから「骨董」趣味に耽溺するものではなく、当時の朝鮮人及びその日常器具にこそ関心を示すと明言している以上、明らかに鈴木孫彦の高邁な文化相対主義的精神は認められる。体制内における「両義的な刷新者」と呼んでよいと筆者は思っている。

付記 写真の解説

1921年当時次女鈴木みどり(1915-2011)は6歳で、遺品の写真集にあどけなく無邪気に近所の友達と戯れる姿が残されている。小学校時代、最初の大和町官舎(和風建築)敷地内の家族集合写真、縁側に座す兄弟姉妹(写真1:左から長男鴻一郎(こういちろう)、次女みどり、三男岡三(けいぞう)、次男周二(しゅうじ)、長女アソ)、引っ越した倭城台官舎(洋風)の玄関口の柱に珍しいのか、掴まって楽しそうな姉弟写真、当時動植物園・博物館を擁し、桜の花見で知られた昌慶苑に家族でピクニックに同僚とともにでかけ、笑みを浮かべるみどりの写真など印象的である。

右記写真1 縁側の背景の居間に四方棚が置かれ、その上には壺が見える。父孫彦のこうした朝鮮陶磁器を中心におく「日用品の美」「雑器の美」的感覚などは家族にも当然影響を及ぼし、小学校時代、みどりの美意識の確立に大きな影響を与えたと思われる。作品に言及されるほど正岡子規(1867-1902)と親交のあった、「趣味人」孫彦は病を得て、1928年任期を満了せず、山口県山



写真1 縁側に座す兄弟姉妹(大和町官舎)

口市後河原に戻り、復職することはなかったが、京城日出公立尋常小学校を卒業後、みどりは、京城公立第一高等女学校に進学、第一学期を終えるまで、浅川伯教宅に居候する。その折、庭で浅川夫人、子供たちとともに撮影したが(写真2:左よりみどり、浅川伯教次女美恵子、浅川夫人たかよ、次男寧悦(やすよし)、長男二四夫(にしお)、長女牧栄(まきえ))、みどりの表情には一人残されたという隠しきれない寂しさが滲み出ている。無理からぬところである。



写真2 伯教宅内記念写真

この写真を伯教宅であると証明してくれたのは、東洋陶磁美術館学芸員・鄭銀珍であった。彼女は大阪市立大学・大学院に留学(修士)、その後2006年就職している。鈴木孫彦・遺品の中から美術館に寄贈した、朝鮮時代の陶磁器の中でも、伯教(伝)作「白磁鉄砂草文碗」は秀逸であった。

2011年度巡回された「浅川伯教・巧兄弟の心と眼—朝鮮時代の美(特別展・浅川巧生誕120年記念)」は美術館連絡協議会大賞を受賞、鄭銀珍はカタログ所収論文「朝鮮陶磁と浅川伯教」でダブル受賞している。この巡回展で展示された中に浅川巧(1929)『朝鮮の膳』があったが、彼女に聞いてみると東京駒場の「日本民藝館」から貸し出されたもので、東洋陶磁美術館に所蔵はなかった。

1929年、みどりは居候生活を終え、後河原に戻り、山口高等女学校に編入している。どうやら巧は出版されたばかりの拙著を手土産にみどりを孫彦に送り届けている。遺品の『朝鮮の膳』中表紙には「鈴木孫彦様浅川巧」と謹呈署名が記してある。東洋陶磁美術館への寄贈に、鄭氏も大喜びであった。なお、近代日本の朝鮮植民地支配研究で知られる歴史学者高崎宗司(1944-)は、浅川巧の複数著書・論文を『朝鮮民芸論集』(2003)としてまとめ、『朝鮮の膳』を所収し、分かりやすく詳細な注を施している。

さて、居候時代、当時朝鮮陶工願望少年であり、戦後韓国を代表する巨匠「知日派」池潤鐸(1912-1993)は柳宗悦・浅川兄弟の薫陶を受けている。その時、みどりと友情を結んでいる。言語形成期を丁度過ぎた頃の2人の出会いは忘れ難く、時を経ても色褪せず、「新鮮な記憶」は心の奥底にしっかりと刻まれていた。大戦を挟んで、音信不通となっていたが、1987年みどりがソウルに遊んだ時、ヘッテホテル地階に池潤鐸陶磁器サロン(陶遊)があるのを偶然見つけ、中へ入ったところ、60年ぶりの再会を果たし、その後池氏が他界するまで交流は続いた(写真3:池潤鐸から届いた年賀挨拶)。

孫彦・後妻千代野(山口高女数学科教諭・みどりの母親・鈴木千代野(旧姓植崎、東京女高師[現・御茶ノ水女子大]卒)が一時期病を得て、東京で入院生活を送るが、病床に子どもたちが頻

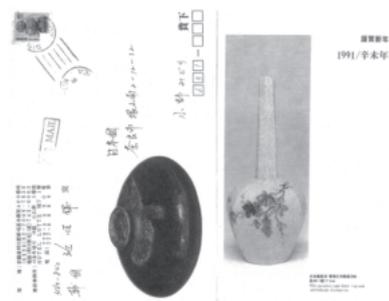


写真3 池潤鐸から届いた年賀挨拶(二通)

繁に見舞い状を送る。そこに長男(1910-1983) 描画「両親肖像スケッチ」(稚拙ながら、孫彦描画の一つとして歴史的価値を有す)が挿入される。長男見舞いの手紙(1918.1.25付)に山口大学経済学部前身高商の「東亞經濟研究會」原稿用紙が転用されている(写真4、5)。

さらに、長女アソ(1908年熊本高商時代に誕生したため阿蘇山に因んで命名された)の見舞い状(1918.2.11付)について、1918年当時まだ3歳にも満たない末娘、次女鈴木みどりのことを「ミイチャンハオホキクナリマシタ」と言及する。また、当時の流行歌のはしり、「さすらいの唄」[5]について「サスライノウタハ三バンダガマダヨクウタヘマセンオシエテチャウダイ」と病床の母親に愛情たっぷりおねだりをしているのがいかにも可愛らしい(写真6)。

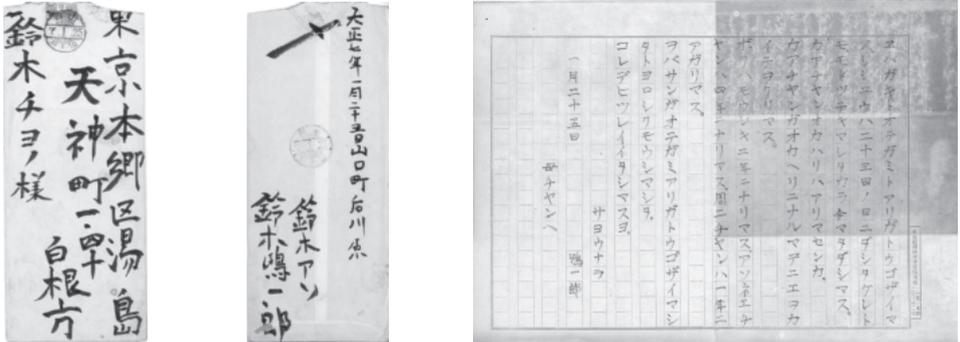


写真4 長男鴻一郎見舞いの手紙 (1918.1.25)



写真5 長男描画「両親肖像スケッチ」入り見舞い状 (1918.2.8)

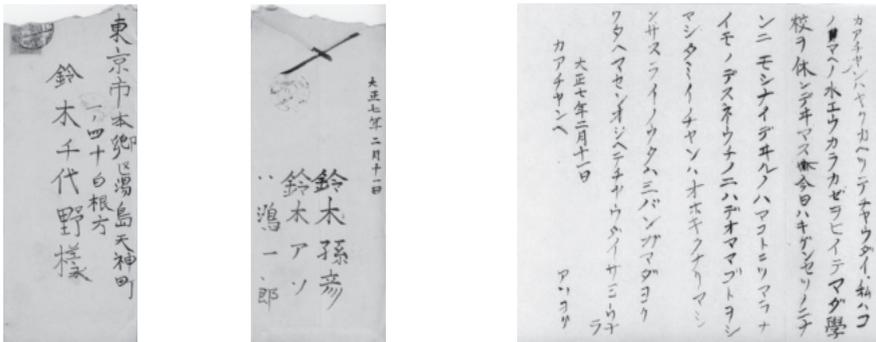


写真6 長女アソの見舞い状 (1918.2.11)

註

- 1) 鈴木孫彦 (1878-1930) : [略歴] 静岡生まれ、東京高商卒業 (商学士)、熊本高商校長を経て、1909年山口高商赴任 (教授)、商業学、商業算術・地理科目を担当、1918-19年商業学海陸運送の研究調査で英米に留学、1907-18年赴任したエドワード・ガントレットとは在任前半期の同僚で、ガントレット夫人恒子 (山田耕笹実姉) などとともに家族交流もあった。宣教師・音楽家ガントレットは耕笹に西洋音楽を手解きし、エスペラント語普及に尽力、日本での商業・実用英語の導入確立者として知られる。山口高商校歌作曲を耕笹が手掛けたのも、この縁である。
- 2) ウィキペディア (online) 「京城高等商業学校」。
- 3) 鈴木は満鉄総裁・野村龍太郎 (小野田 2012) とは京城時代に知己を得るが、帰国後、1929年当時東京地下鐵道株式会社取締役社長職にあった野村から、銀座線・浅草停車場ビル直営食堂開業招待状 (1929.9.23付) が届くが、未開封のまま遺品から発見された。写真7、8、9を参照。
- 4) この浅川の追悼は、(浅川 1930: [3] - [4]) にある、俳句仲間当時ハンセン病対策で赴任していた軍医・花井善吉との再会、及び花井と鈴木が同郷であったことから、俳句を巡る三者の関係が記述され、人道主義医療者故・花井にも向けられていることを附言しておきたい。浅川は、鈴木の出張先満洲の歌を通して、孫彦を一級俳人とし、「素性のよい歌」(浅川 1930: [2]) の詠み手と評価する。鈴木は、1899年3月14日正岡子規 (1867-1902) の「子規庵」(東京下谷上根岸) で開催された歌会を源流とする根岸短歌会は同人で、芸術への敬愛の証しとして和歌を嗜んでいた (ウィキペディア「根岸短歌会」online)。一方、浅川は俳人仲間として、1916年創設「官立全羅南道小島島慈恵医院」第二代院長として赴任した軍医・花井善吉 (在任: 1921-1929.10.16.脳溢血殉職) と京城俱樂部歌会で偶然会う。20年前甲府聯隊・衛戎病院長の頃、句会で知り合っていた二人は、「竹を割った様なよどみの無い人であつた、患者にメスを下す事が上手で、名醫の評判が高かつた」(浅川 1930: [3]) 花井の京城出張宿先で、旧交を温める。花井は過去20年を述懐し、俳句詠みの推敲作法を披露する。実は「鈴木孫彦」追悼連載は同時に、花井善吉の医者魂に由来する人道主義的实践を「菩薩心」(浅川 1930: [4]) の為せる技として高く評価し、彼を追悼している。

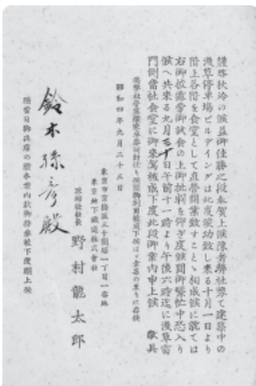


写真7 野村龍太郎からの招待状 (1929.9.23)

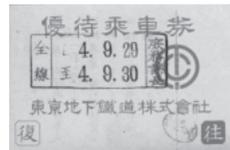


写真8 未開封招待状に入っていた乗車券 (未使用)

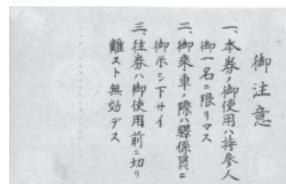


写真9 乗車券裏側に印字された注意書き

二人の邂逅の旧交は1925年と思われるが、小鹿島医院はハンセン病院で、「今年も二百人收容する設備をするために」（浅川 1930：【4】）京城に出張してきている。その結果、1925年4月1日医院拡張のための「地方官官制改訂令」（総督府勅令第85号）が公布され、翌年小鹿島慈恵医院の第一期拡張工事が実行される。前院長時代の平均死亡率が10.97%、花井時代にはその数字が1.08%に激減したことで証左されるように（吉田 2012：436）、彼の人道主義的救ハンセン病（癩）思想は現地で高く評され、浅川に「明るい清潔の設備に皆んな喜んで働いて全快して歸る者も多い。島は温かいし、空気が澄んで居るし、患者各自もこの世と隔離されて居るといふ感じさへ起さず、働いてゐる」（浅川 1930：【4】）とみずからの実践を誇りを以って語る。また、小鹿島に初めてキリスト教会を建設し、信教の自由も保証するなど、1919年三一運動を契機として方針転換された「文化統治」が可能ならしめた「寛容精神」を最大限実現した証しとして建立された「花井善吉院長・彰徳碑建立」は歴代院長唯一の記念碑として現在も残る（恨生、online）。ただ一方、「懐柔策」の一環で1926年着手した第一期拡張工事で土地買収を巡って現地住民と軋轢を生み、結果的に国家権力の正当性を保証し、総督府政策の一翼を担う存在に過ぎなかったとする否定的な評価もある。20年ぶりの再会に俳人鈴木孫彦も話題に上り、その日のうちに南山町官舎に電話を掛けて、浅川仲介で遠州同郷の二人は初対面する。俳句を中心にそれぞれの青年時代の文学的追憶を共有し、夜を更かす。

- 5) 流行歌「さすらいの唄」（当時、松井須磨子がロシア戯曲上演で歌唱した（滝の小道 online；エムズの片割れ online）

※鈴木孫彦は筆者の義祖父にあたり、下記「手稿」については、翻刻デジタル化作業を進め、今後同時代を知る一次資料として報告したい。

参考文献

手稿：

- 鈴木孫彦・山口高商・経専時代在職手稿メモ（明治・大正期）〔資料請求番号順〕：

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1) 著者不詳〔鈴木孫彦と推測されるもの〕「商業通論講義提要」（講義案）菊判：山口大学図書館：600（221）44-307. 2) 鈴木孫彦・近藤英三（1909）「新案商業簿記」菊判：山口大学図書館：651（221）：44-353. 3) 著者不詳〔鈴木孫彦と推測されるもの〕「鐵道講義提要」1-3（講義案、細目ハ基本カードニアリ）菊判：山口大学図書館：683（221）63-61. 4) 著者不詳〔鈴木孫彦と推測されるもの〕「海運講義提要」上巻（講義用プリント）菊判：山口大学図書館：690（221）：9-38 5) 鈴木孫彦（1917）「海運之経営」（山口高商講義案）菊判：山口大学図書館：690（221）9-50. |
|--|

新聞資料

- 浅川伯教（1930）「鈴木先生」【1】-【6】『京城日報』（1930.5.14-5.20）連載：国立国会図書館所蔵、1915-1945：資料請求番号：YB-96。1930年5月18日掲載は日曜でなし。

文献：

- 浅川巧(2003)『朝鮮民芸論集』高崎宗司編, 岩波書店.
- 趙仁錫(1999)「京城高等商業学校の足跡」『拓殖大学紀要』3:19-34.
- 伊藤徹(2003)『柳宗悦 手としての人間』平凡社選書.
- 小野田滋(2012)「鉄道人物伝5鉄道建設とともに 野村龍太郎」『RAILFAN』709:32-34.
- 宇治郷毅(1988)「近代韓国図書館史の研究—植民地期を中心に—」『参考書誌研究』34:1-27.
(http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3051261_po_34-03.pdf)

オンライン資料：

- 阿部安成(2013)「蝶番としての海外修学旅行:20世紀前期帝国日本と高等商業学校研究の展望」
『一橋大学附属図書館研究開発室年報』1:23-42.
<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/25661/1/rdo0000100230.pdf>
(閲覧:2018年7月28日)
- ウィキペディア「京城高等商業学校」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/京城高等商業学校>
(閲覧:2019年1月10日)
- ウィキペディア「根岸短歌会」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/根岸短歌会>
(閲覧:2018年7月28日)
- エムズの片割れ(ブログ)
「東京リーダーターフェル1925の『さすらいの唄』」
<http://emuzu-2.cocolog-nifty.com/blog/2009/03/1925-b0e0.html>
(閲覧:2018年7月28日)
- 木部和昭(2009)「山口高等商業学校の東アジア教育・研究と東亜経済研究所」『東亜経済研究』
67-2:47-61.
<http://petit.lib.yamaguchi-u.ac.jp/G0000006y2j2/metadata/C040067000205>
(閲覧:2018年7月28日)
- 滝の小道(ブログ)
「さすらいの唄」
<http://www13.big.or.jp/~sparrow/MIDI-sasurainouta.html>
(閲覧:2018年7月28日)
- 日韓ハンセン病関係年表
<http://www.eonet.ne.jp/~yokati/nenpyou.htm>
(閲覧:2018年7月28日)

- 恨生（はんせん）

「はない（花井善吉）院長・彰徳碑建立」

<http://www.eonet.ne.jp/~yokati/siryokan/hanai%20hi.htm>

（閲覧：2018年7月28日）

- 鈴木孫彦関係資料（下記URLに「すずきまごひこ」で検索）

<http://mickey.lib.yamaguchi-u.ac.jp/~cat/>（閲覧：2018年7月28日）

- 山口高等商業学校編

『山口高等商業学校一覧』（明治・大正期）

『山口高等商業学校沿革史』（明治・大正期）

https://sakuyakai.net/modules/head_info/index.php?page=article&storyid=309

（閲覧：2018年7月28日）

- 山口大学編（2013）『創基200周年・山口大学の来た道3－山口高等商業学校から専門学校誕生まで－』

http://www.yamaguchi-u.ac.jp/200th/history/historyOfYU/_3454.html

（閲覧：2018年7月28日）

- 尹春志〔ユン・チュンジ〕（2009）「『東亜経済研究』の一断章－大正から昭和初期の「東亜」の構想」
『東亜経済研究』67-2：25-45.

<http://seis-trinf.seinan-gu.ac.jp/detail/paper/0000005238.html>（閲覧：2018年7月28日）

- 吉田幸恵（2012）「統治下朝鮮におけるハンセン病政策に関する一考察－小鹿島慈恵医院設立から朝鮮癩予防令発令までを中心に－」『Core Ethics』8:433-443.

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsce/ce/2012/ys03.pdf>

（閲覧：2018年7月28日）

（投稿日：2018年7月30日）

（受理日：2019年1月30日）